「悲劇の星雲」との格闘

――文學としての『史記』研究序説――

谷口　洋
奈良女子大學

本稿の題目は、ひどく氣障なものである。それが妥當なものであるか否かは、讀者の判斷にゆだねるとして、あまりにも大上段に振りかぶった副題については、はじめにいささかの辯明を試みておきたい。

近年、『史記』や司馬遷に關する書物が、日本でも中國でも續々と出版されている。その多くは、歷史畑の研究者によるものである。この背景には、相次ぐ考古學的發見によって、中國古代像の書き換えがさまざまな局面で進み、その中で『史記』と司馬遷をとらえ直そうという機運が高まってきたことがある。

ところで、『史記』は歷史である以上に文學である、とはよく言われるところである。史學者の間で、『史記』をとらえ直す試みが次々になされている中、その成果にも目を配りつつ、文學研究の立場から『史記』を讀み直すことも、また求められているのではなかろうか。

われわれは『史記』を讀むと、文學作品に接したのと同種の感情をしばしば覺える。しかし、『史記』が初めから文學作品として書かれたのではないこともまた事實であり、そのような『史記』のどこが、どのような意味において文學であるのかを說き明かすのは、實はそれほど簡單ではない。答えがわかったようでいてその實よくわかっていないこの問いに、いま一度向き合ってみようというのが、大仰な副題にこめられたささやかな意圖である。

一　『史記』は司馬遷の「作品」か？

『史記』の文學性のよって來たるところについては、これまでにも多くの言說が積み重ねられてきた。本稿は文學としての『史記』研究史の總括①を目指すものではないが、これまで『史記』がどのような視點から讀まれてきたかと

いうことは、やはり一瞥しておく必要があろう。

『史記』は百三十卷からなる浩瀚な書であるが、全體を貫く筋があるわけではなく、必ずしも卷一から順を追って讀まなければならないというものではない。むしろ、『史記』の讀み手たちは、吳越の對立、秦の盛衰、楚漢の抗爭といった個別の話を、獨立したひとつのドラマとして味わうことの方が普通であった。そしてその中で、夫差の、句踐の、始皇帝の、趙高の、項羽の、劉邦の、一擧手一投足に、ある時はそれぞれの人物になりきって感嘆の聲を漏らし、ある時は傍觀者の立場から論評を加えてきたのだった。

それと並んで、古くから盛んになされてきたのが、『史記』の文章を論評することであった。唐宋の古文家や明の古文辭派によって、『史記』は文章の規範の一つとして尊崇された。『史記』はしばしば『漢書』と比較されてきたが、その際、史書としての體例や記述の妥當性を純粹に史學史的な立場から論評するものは、劉知幾『史通』など少數の例外にとどまり、むしろ、兩者の文章の優劣を論ずることの方が多かった。そしてそこでは多くの場合、『史記』に軍配が擧げられてきた。

このように、話の內容や登場人物に對する感興を述べたり、文章の優劣を品評したりするというのは、今日的な視點からいえば、對象を文學としてとらえていると言ってよいだろう。中國の書物の中で、このような受容のされ方をしてきたのは、詩や散文などの狹義の文學作品を除けば、何といっても歷史書であり、その中でも飛び拔けていたのが『史記』と『漢書』である。そのことは、明代に入って、諸家の論評を集めた『史記評林』『漢書評林』のような書物が編まれたことにもうかがえる。評林本の眉注には、もとより訓詁や史實の考證も多く書き込まれているが、しかし量的に多いのは、作中の事件や人物に對する感興であり、司馬遷や班固の文章に對する論評である。それらは、『史記』『漢書』を研究對象として見る者にとっては、よけいなものかもしれない。そうはいっても、鴻門の會、李陵と蘇武の別れといった名場面にびっしりと書き込まれた批語は、『史記』『漢書』のそれらの場面が、文學として讀み繼がれてきたことの雄辯な證據である。

しかし、『史記』については、『漢書』には見られないようなまた別の意味において、ひとつの文學として讀まれてきた歴史がある。それは、『史記』を『水滸傳』などの小説とともに「六才子書」のひとつに數えた金聖歎のように、『史記』を、司馬遷が自らの感懷をぶちまけた「作品」としてとらえる方向である。『史記』の文章を評したり、各場面における事件や人物の描寫について論じることも、『史記』を司馬遷の作品として見ているとはいえる。ただそれらが、あくまで個別の場面について、主として表現技術のレベルを云々しているのに對し、ここでは、『史記』の全體が、作者司馬遷の心情表現として、ひとつの主題のもとにとらえられる。言い換えれば、『史記』の中から文學性をもつ個別の箇所を取り出して論じるのではなく、『史記』全體を、ひとつの文學作品として統一的に見ようとするのであり、『史記』を文學としてとらえるという點では、より徹底した方向といえる。さらに、このような作者の心情表現としての讀まれ方が、『漢書』をはじめとする他の史書においてはまずなされないことを考えるなら、これこそが『史記』の文學性の最もユニークな點であり、『史記』の文學性の核心なのだ、という考えにもゆきつくであろう。

中國の古典に對しても、近代的な文學研究の光が當てられるようになれば、『史記』を司馬遷その人の「作品」としてとらえる立場からの研究が現れるのは、上に述べた『史記』受容のあり方から考えれば、必然の成り行きであったといえよう。魯迅が『史記』を「史家の絶唱、無韻の離騷」[2]と呼んだのもこの流れの上に位置するものであるが、我が國には、その方向を徹底し、以後の『史記』研究にさまざまな波紋を投げかけた問題作が現れた。ここにおいてわれわれは、やはり、かの武田泰淳の『司馬遷』[3]にふれなければなるまい。

「司馬遷は生き恥さらした男である」――この冒頭の一文に象徴されるように、武田氏の論は、『史記』を司馬遷の「發憤」の産物とみる立場で一貫している。この書の第一篇は「司馬遷傳」にあてられているが、そこではまず、「任少卿に報ずるの書」の自由な現代語譯が掲げられ、宮

刑に處せられた司馬遷の絶望と執念とが指摘される。「ただ一つ記錄すること。他は忘れはてた。いや忘れはてたふりをした。是が非でも忘れようと必死であつた。……政治を棄て去り、倫理をあきらめたやうに見えて、實はこの期間ほど司馬遷が、政治と倫理の本質をきびしく考へつづけた事はなかつたと思はれる。④」

司馬遷の「發憤」から『史記』をとらえる見方それ自體は、特に武田氏の獨創に出るものではないし、そもそも武田氏の書そのものも、嚴密な學術研究というよりも、著者自身の言葉を借りれば「歷史論とも、思想論ともつかぬ、文藝評論風の風の字つきのもの⑤」であった。ただ、武田氏の書が、司馬遷の「發憤」を思い入れたっぷりに語るばかりのものではないことには、十分注意しておく必要がある。「司馬遷が、きびしくなつたのは、天漢二年、李陵の禍によつて獄に下つてからではない。少年時代、青年時代からである。幼年時代からと言つても、良いかも知れぬ。と言ふのは、彼が歷史家の家庭に生れたからである。⑥」氏はこう言って、司馬遷の「執念」「きびしさ」の背後に史官の使命感があることを指摘した後、「司馬遷傳」という表題とはうらはらに、もっぱら司馬遷の父、司馬談を論じている。

司馬談は、太史令として、武帝の封禪という盛儀に關與するはずであったにもかかわらず、帶同を許されず、「發憤して且に死なんと」した。武田氏は、司馬談の「發憤」の背後に、封禪をめぐる儒者と方士の對立、そして儒者の排斥があったことを指摘し、その心中をおもんぱかっていう。「司馬談が諸儒と同意見ではなかつたにしろ、封禪の現代化、神仙化、通俗化には反對してゐたと見て萬誤りはない。……問題は封禪と見えるが、實は漢代文化全般である。封禪はその一端に過ぎぬ。司馬談はかかる封禪を生んだ漢代文化を徹底的に批判したかつたであらう。⑦」

太史令を繼いだ司馬遷はこの無念を受け繼ぎ、歷史家の任務に沒頭していた。武田氏は、太史公自序に引かれた董仲舒の「天子を貶し、諸侯を退け、大夫を討じて、王事を達す」という言葉から、『史記』述作に對する司馬遷の思いを推し量っていう。「この說によれば、記錄者は、記錄

が目的ではない。王事宣明が目的である。それ故、記録者は、批判者でなければならぬ。……己の生活する現實を、亂世なりと、觀ずる所から出發せねばならぬ。[8]」ところが、やがて自身も李陵の禍に遭い、宮刑に處せられる。しかしこの「重い、深い、致命的な傷」こそ、司馬遷が偉大な歴史家として生まれ變わる契機となった。「今や、彼は無爲自然に記録するであらう。それによつて、あらゆる事をなすであらう。記録者は、起ち上つたのである。[9]」

氏の「司馬遷傳」は、「記録者」の決起を述べたところで終わり、この書の殘り四分の三は、「『史記』の世界構想」と名づけられた第二篇にあてられている。そこでは、司馬遷の「發憤」そのものは背後に退き、「記録者」に徹し、世界を描き盡くそうとするその冷靜な意志と、そこに描かれる世界の巨大さとが強調される。

第二篇において、武田氏の態度がより客觀的なものになったとみることは、もちろんあたらない。氏をして、司馬遷の「發憤」と、その結果としての「きびしさ」とに對する關心を抱かせたのは、自身の戰地の體驗と、いよいよ混迷の度を深める戰局であった。[10]後記において數多くの研究書を論評し、諸家の司馬遷年譜の對照表まで作ってはいるものの、アカデミックな研究は、もとよりその志向するところではなかった。

しかしながら、戰時中という特殊な狀況も手傳ってか、武田氏は、單に司馬遷の「發憤」に共鳴し、ともに慨嘆するのみならず、むしろ司馬遷が、「無爲自然の記録者」となっていった過程と、そこから生み出された結果とに寄り添おうとしていったようである。氏は、「發憤」の內容を、自らを宮刑に處した漢武帝への個人的怨恨に局限することはしていないし、『史記』の個別の記述を、安易に「發憤」に結びつけることもしていない。司馬遷の心情に對する深い共感に始まったこの書は、かえってそのゆえに、結果として、「發憤」を熱く語るよりも、記録そのものの冷徹さに多く筆を割くことになった。論の對象は、一般に好んで取りあげられる列傳や一部の本紀にとどまらず、一見文學とは無緣とも思える表にまで及び、この數字の羅列の中に、「史記的世界の絶對的持續」を讀みとろうとするのである。[11]

それはまた、個々の卷の話のおもしろさに流されて全體を見失うことなく、〝作者〟司馬遷の「無爲自然の記錄者」という立場から、『史記』の全體像を見据える視座を手に入れたということでもある。このような視座は、近代的な文學研究のあり方と相容れないものでは決してなかった。むしろ、『史記』を近代的視點からの文學研究の對象として扱おうと考える研究者にとって、ひとつのモデルを提供したとすら言い得るのである。加えて、のちに作家として名を成す氏ならではの鋭い指摘と、各卷の細部から全書の構成に至るまでを論じた視野の大きさとは、『史記』の研究者にも裨益するところ大であった。當時の文壇に波紋を投げかけたのみならず、戰後にも讀み繼がれ、武田泰淳の代表作ともいわれるこの書が、研究者にも大きな影響を與え、『史記』研究史上においても確固たる足跡を殘したのは、決して故ないことではない。

とはいえ、戰後の我が國の學界においては、武田泰淳のように『史記』の全體を一つの文學としてとらえた著作は、すぐには現れなかった。もちろん、それは決して『史記』に對する文學者の關心が低かったことを意味するわけではない。むしろその逆に、一九五〇年代から六〇年代にかけて、『史記』の譯注や解說書は盛んに出版され、その中には文學畑の研究者によるものが少なくなかった。[12] 個別の問題に關する論文も、少なからず發表されている。にもかかわらず、『史記』の全體像を論じた本格的な專論としては、李長之やバートン・ワトソンといった海外の學者による著作[13]のほうがまず想起され、日本において同樣の書物を見いだすのは難しい。その理由を考えるに、武田泰淳の衝擊があまりに大きかったということもいえるかもしれないが、それ以上に、『史記』の內容とスタイルがきわめて多樣であるために、それをひとつの文學的統一體として論じるのが困難であるということが、より本質的な理由として擧げられる。

『史記』を文學として讀む際の一つの問題は、卷によって筆致が極端に違うことである。さながら芝居を見るような臨場感豐かな卷もあれば、砂を嚙むような無味乾燥な箇所もある。『史記』には小說的・戲曲的な箇所も多くある

が、司馬遷はもちろん小説や戯曲を創作したのではない。彼自ら「厥れ六經の異傳を協せ、百家の雜語を整齊す[14]」と言い、班固が「司馬遷は『左氏』『國語』に據り、『世本』『戰國策』を采り、『楚漢春秋』を述ぶ[15]」と言うように、『史記』は、先行する多くの文獻を利用して書かれている。それらの文獻のうち現存するものを『史記』と突き合わせると、おおむね一致しており、司馬遷が、決して勝手に原史料を改竄したりしていないことがわかる。そうした典籍以外にも、『史記』には年代記や詔勅・上書などのお堅い政治文書が延々續く卷もあるが、それらもやはり、朝廷に保存されていた「石室金匱の書[16]」に基づくのであろう。『史記』のある部分を讀んでわれわれが文學的感興を感じるか否かは、畢竟、司馬遷が基づいた史料そのものが、文學性豊かなものであったか否かによるのである。そうであるなら、『史記』を司馬遷の作品であるかのように取り扱うことがためらわれるのは當然であろう。

もちろん、『史記』が先行文獻に依據しているからといって、司馬遷の獨創性が損なわれるというわけでは決してない。田中謙二氏は、この時期に『史記』に關するいくつかの論文を發表しているが、そのうちのひとつ「史記における人間描寫[17]」では、まさに司馬遷が多くの先行史料を用いている點に注意し、そこから司馬遷の「祕密の部屋」をのぞくことは、われわれにとって不可能ではないと述べる。その實例として晉世家をとりあげ、司馬遷が依據したと思われる『春秋左氏傳』『國語』との差異を丹念に檢證する。そして、司馬遷が、「眼前の資料に對し消極的には選擇を加え、積極的には書きかえ――一種の創造――を敢行して」『史記』の世界を構築したという結論を導く。

その方法が研究としての手堅さを備えているのは當然のこととして、ここでは、『史記』における司馬遷の役割が、武田泰淳の場合とは大きく違っていることに注意しないわけにはいかない。武田氏の描く司馬遷は、『史記』の世界のすべてを創り出し、そのすみずみにまで自らの意志をゆきわたらせようとする、造物者ともよぶべき存在であった。むろん武田氏とて、司馬遷が小説家のような意味で創作したのではないことはわきまえている。彼はただ「無爲自

然」に記錄したにすぎないし、なおかつ、「司馬遷は、史記的世界を創り出したが、その結果、その中心が信じられなくなり、人間不信に陷つた」[18]のであって、自らが描いた世界の上に泰然と君臨しているわけではなかった。そうはいっても、「無爲自然に記錄する」ことによって「あらゆることをなす」というのは、やはり司馬遷を造物者に比すべき存在として見ていたのである。それに對し、田中氏のとらえる司馬遷は、時には書き換えさえ行うものの、基本的には既成の材料を自らの意圖に沿って選擇し排列する、いってみれば雜誌の編集長のような立場であり、『史記』に對する司馬遷の地位は、ずいぶん輕くなっていると言わざるを得ない。實際に司馬遷がしたことに近いのは、むろん後者の方であろう。

ただ、『史記』のすべてが司馬遷の意志と感情の投影であるかのよう見るのは行き過ぎであるとしても、十二本紀・十表・八書・三十世家・七十列傳という構成は司馬遷の考えによるものであり、その構成に何らかの意圖を讀みとろうとした武田氏の試みそれ自體は、決して見當はずれのものではなかった。ところが、田中氏は、具體的に個々の卷を先行文獻と比較するという道を選んだために、その研究はむしろ、『史記』の個々の表現の意味を探求し、そこに司馬遷の意圖を見いだそうとする方向へと向かった。むろん氏は、『史記』の個々の表現の背後に、司馬遷の「永遠の人間の典型を描く立場」があったことを力說してはいる。しかし氏の方法による限り、その「永遠の人間の典型を描く立場」は、史料操作と文章表現のレベルにおいてしか明らかにはならない。ここに、『史記』を文學として研究することの難しさが端的に現れているように思われる。

『史記』は歷史である以上に文學である、という言い方がされるとき、それはそれぞれの卷の個々の話についてそうであるばかりではなく、『史記』全體に通ずるひとつのトーンとでもいうべきものが、それとなく感じとられているのだ。しかし、それが何であって、どこからもたらされるのかを說き明かすのは、實はそれほど簡單ではない。

二　『史記』は史料集か、物語集か？

『史記』を司馬遷の手による、ひとつのまとまった作品として見る態度と對極にあるのが、近代歴史學の立場であろう。そこでは、『史記』はあくまで中國古代史の史料として扱われ、「作者」司馬遷の個人的境遇や感情は顧慮されない。また、そこに書かれている一つ一つの事實こそが重要なのであって、『史記』全體の主題などは問題にされない。ここでの司馬遷は、單なる史料蒐集者でしかない。もちろん、史學者たちも、司馬遷について、『史記』全體について語ることがあるが、それはもはや、史學史という別の學問分野に屬する事柄なのである。

もっとも、『史記』がそのままでは史料として使えないことは、當の史學者たちが誰よりもよく知っていた。近代歴史學の史料批判が、『史記』の史料として使えない部分を明らかにすればするほど、それはかえって、『史記』の文學としての側面をあぶり出すことになった。宮崎市定氏の研究の中に、そのよい例を見いだすことができる。氏は、論文「身振りと文學――史記成立についての一試論――」[19]において、項羽本紀の「鴻門の會」をはじめとする劇的な場面が、「語」「偶語」と稱される一種の語り物からとられたものであり、それらは本來漢代の都市の市において上演された藝能であったとの想定を示した。また「史記李斯列傳を讀む」[20]においては、この卷の構成上の不統一に注目し、それが本來、李斯以外の人物を主人公とした複數の材料から再構成されたものとみる。すなわち、前半の上書は、後人が擬作した政策例文集、後半は趙高と始皇帝・二世皇帝をめぐる物語、さらに、出世をめざし荀子のもとを離れ、最後に破滅するという全體の大枠は、荀子の弟子たちを比較して名譽欲や權勢欲を批判する民間の説話に取材したという。そして後二者については、「身振りと文學」で論じたところの「語」であったと推測したのである。

宮崎氏のこれらの研究は、『史記』をいくつもの物語に分解し、それらを小説・戯曲としてとらえるものであった。それは、『史記』の史料批判という本來の意圖とは別に、『史記』を、司馬遷の作品とする見方とは全く別の次元で、

近代的な文學研究の對象とする方向を打ち出したものといえる。「身振りと文學」が『中國文學報』に掲載されたことは、この論文の意義を端的に示すものであろう。『史記』を司馬遷の作品として見る立場は、實證性を追求する過程で、『史記』をそれぞれの部分に分解せざるを得ず、『史記』全體を統一體としてとらえるという本來の意圖に照らせば、やや行き詰まりを呈した感がないではない。それに對し、近代歷史學は、はじめから『史記』を史料の集積に分解することをめざしていたのであり、その手法は、そのまま、『史記』を物語の集成に還元し、それを小說史・戲曲史の近代的研究の素材として利用する道を開いたのである。さらに、文學研究において、作品を單純に作者の感情の反映と見る方法論への反省がなされてきたことも、『史記』を、むしろ素材の集積として見ることを促したであろう。

そうした中で、『史記』とは何か、司馬遷は『史記』において何をなしたのか、という問いに正面から向き合ったのは、少なくとも我が國においては、むしろ史學界の側であったかもしれない。『史記』のどこまでが史料として使えるのかという問いは、出發點としては、『史記』の各部分についての個別の史料批判から始めることになるが、やがては、そもそも『史記』とはいかなる性質の文獻なのかを問うことにゆきつくはずだ。ましてや、『史記』は、中國古代史研究における基本的文獻なのだから、その素性を突きとめることは、史學者にとって焦眉の急となった。もし宮崎氏の論の通りであれば、李斯列傳は、後人の擬作した文書と民間の語り物とから作られたものであって、史料的價値は全くないということになる。李斯列傳だけならそれでもよかろうが、もし『史記』の全體が物語の集積だということになれば、中國古代史研究は、大きな制約を受けることになってしまうのである。

『史記』を、物語としてではなく、周邊の事實の實證的研究の中でとらえ直そうとする史學者たちにとって有利に働いたのは、二十世紀に相次いだ考古學的發見である。古くは、殷墟の甲骨文によって、殷本紀に記された商王朝の系譜の正しさが證明されたことがあったが、近年において

は、馬王堆帛書『戰國縱横家書』をはじめとする戰國期の簡帛を用い、とかく問題の多い『史記』の戰國期の記述について、その史料的價値を再検討する試みが地道に行われている。[21] また、楚系文字資料や戰國各國の日書など、戰國期史料の多様性を示す發見は、『史記』研究にも新たな展開をもたらした。平勢隆郎氏は、誤りの多いことで歴代の史家を惱ませてきた『史記』六國年表について、戰國期には各國で紀元法や暦法が異なっていたことをふまえ、すべての記事にわたって矛盾なく排列し直した。すなわち、戰國諸國において、ある時期までは、王が卽位すれば年の改まるのを待たず直ちに改元していたこと、各國で暦法が異なるために年の初めも異なったこと、武烈王・威烈王といった二字の謚號が普通に存在したこと、司馬遷がこれらの事實に對する知識を缺いていたために、原史料を誤って解釋した結果が六國年表の矛盾に現れているのであり、彼が誤った過程を逆にたどれば、すべての記述を本來の位置に戻すことができるというのである。[22] このように、『史記』を史料集としてとらえ、その價値を再評價する研究は、近年ことにめざましい成果をあげている。

さらに平勢氏は、こうした史料操作の問題から一歩踏み込んで、『史記』という書物の意味にまで言及している。戰國諸國においては、史書の體裁を採りつつ自らの正統性を示す書物が多く編まれた。たとえば『春秋』や『公羊傳』は齊の正統を主張するものであり、魏では『竹書紀年』、韓では『左傳』、中山では『穀梁傳』がその役割を擔った。それと同様に、『史記』も、漢王朝、なかんづく武帝の治世を記念するために書かれたのであり、十二本紀の構成をはじめ、隨所にその意識が見られるという。[23]

たしかに、司馬談の遺言では、封禪に參與できないことを嘆くとともに、「明主賢君、忠臣死義之士」を論載すべきであることを述べている。武田泰淳は、司馬談が自らの時代に對し批判的な見方をしていたことを強調していたが、司馬談は一方で、武帝の封禪に時代を畫する意義を見出し、その記念すべき世を記錄せねばならぬと考えていたのであり、さればこそ封禪からの排除が、死を招くほどの「發憤」をもたらしたのである。その後司馬遷が太史令となり、

封禪とならんで新たな時代を畫するできごとであった太初曆の制定にかかわった際も、父の言葉を思い出し、『史記』執筆への志を新たにしている。こうした點から見て、『史記』が本來漢武帝の治世を記念する書であったとするのは、説得力のある論であるとはいえる。ただこのような立場からは、李陵の禍という、司馬遷の個人的體驗のもつ意味に注意が向けられることはない。

そもそも、司馬遷にとって、李陵の禍とは何だったのか。この問いに對しても、史學者たちは、「太史公自序」や「任少卿に報ずる書」における司馬遷自らの述懷だけに頼ることなく、その前後の司馬遷の狀況についての次のような指摘をふまえた上で論じることになる。司馬遷が腐刑に處されたのは、李陵を辯護したことが武帝の意に染まず、その怒りを招いたからという單純な理由ではなく、李陵を辯護することが、同じ時期に匈奴に出兵していた貳師將軍李廣利をおとしめる誣告罪にあたると判斷されたからである[24]。また、當時の制度からいって、刑罰は吏に議を下して決定されるものであり、上申されてきた量刑に對しては、皇帝といえども異議を差し挾むことはなかった[25]。司馬遷に對する嚴しい判決は、武帝の意におもねった公卿大夫たちの意向によるものだったのであり、ならば、李陵の禍は、しばしば思われているような、武帝と司馬遷との間の正面切った確執では決してなく、むしろ公卿大夫らによる政治的陰謀とみることもできる。さらに、腐刑に處されたのちも、司馬遷は中書令として重用され、『史記』執筆に必要な資料の閲覽に際し、特段の配慮を得ていたと考えられる[26]。こうした點に照らせば、李陵の禍が『史記』の執筆にどのように影響したか、あるいは影響しなかったかということは、改めて考え直されなければならないということになる。

むろん史學者の中にも、佐藤武敏氏のように、李長之らの論を批判的に繼承し、李陵の禍が『史記』の内容に大きな影響を與えたと見る學者はいる。氏は、『史記』の各編を執筆年代によって六つのグループに分けた李長之の論[27]を批判し、李陵の禍以前と李陵の禍以後の二つに大別することを提案しているが、その判斷規準の一つとして、「たとえば人間、歴史、天などに對する見方が、李陵の禍を境に

してどう變ってきているか」を重視している。[28] ただその場合も、『史記』の執筆がすでに父・司馬談の時に始まり、李陵の禍以前にかなり進行していたことに注意し、[29] 武田泰淳のように、司馬遷の「生き恥」から出發して『史記』を考えるという立場には決して立たないのである。

『史記』は本來、中國古典の「文史不分」の傳統をもっとも典型的に示す書物であった。かつては、中國のみならず我が國においても、『史記』は、歴史の書であるだけでなく、文章の模範の一つでもあった。歴史として讀む場合も、過去の事件を通して人生の教訓を得る思想の書としての役割が期待されていたし、歴史的局面における人間のさまざまな姿を味わう文學としての機能をも果たしていた。それはまさしく、司馬遷自身が宣言するとおり、「一家の言」[30] なのであった。優れた古典が常にそうであるように、『史記』はさまざまな角度から人生のありさまを描き出し、人々は何度となく嘆息しながら、そこに世界の眞理を讀みとり、人生の指針を得てきた。これらが總合されて、『史記』の古典としての價値を形成していたのである。

しかし、近代歴史學の角度から、『史記』を史料として讀むとなると、そこに含まれる物語的な記述は、史料的價値のないものとして排除されることになる。逆に文學として見れば、その物語性にこそ『史記』の魅力があるといえる。同じ文學の立場でも、個別の卷を物語として味わう方向と別に、作者司馬遷の境遇に注目し、『史記』をその心情の吐露された作品と見るとらえ方もある。近代に入り、それぞれの立場からの研究はめざましい發展を遂げたが、しかし各々の學問分野はいよいよ細分化の度を深めていった。その結果、『史記』の價値を支えていた多樣な側面は分離し、ときには互いに矛盾さえするようになってしまったのである。こうした狀況は、『史記』そのものにとっては、あるいは不幸なのかもしれない。

もちろん、本文の趣旨は、このような狀況をいたずらに嘆くことに存するのではない。ただ、司馬遷と『史記』に關する實證的研究が進むにつれ、武田泰淳のような讀み方が成り立ちがたくなっているのは事實であり、そのことは、『史記』を文學として研究しようとする際にも、認めなけ

ればならないことなのである。

三　「物語の星雲」としての『史記』

ではこのことをふまえた上で、『史記』を文學として讀むというのは、どのようなことなのだろうか。

まず、『史記』の文學性の根源は、その豊かな物語性にあるという點は、承認されてよいのではなかろうか。はじめにふれたように、『史記』の讀み手たちは、そこに收められた個別の話を、獨立したドラマとして味わってきた。『史記』に物語的記述が多いことは、誰しも認めることであり、宮崎市定氏のなしたような研究を、より廣範に、精緻に進めてゆくことで、今後さらに多くの物語が『史記』から發掘される可能性がある。

もちろん、『史記』をあまりに物語に引き寄せて、理解を誤るようなことがあってはならない。かつてマスペロは、『史記』蘇秦列傳に物語的な誇張が多く、そこに述べられる事件の年代にも矛盾があることから、蘇秦の事蹟を虛構の小說と考え、[31]學界に論爭を引き起こしたが、その見解は今では否定されている。『史記』には年代の誤りや蘇秦・蘇代の兄弟の取り違えなどがあるが、蘇秦という人物が實在し、戰國諸國の外交で手腕をふるったのは事實であり、帛書『戰國縱橫家書』の發見もそれを裏づける。

とはいえ、古代において、歷史的事件が物語の形式で傳承されるのはあたりまえのことであり、『史記』が史料に基づき史實を述べることと、その表現が物語性に富むことは、何ら矛盾するものではない。史學者が、『史記』の史實性について新たな成果を續々と出している昨今にあっては、むしろ、文學研究者も、『史記』の物語的側面の研究をいっそう進めるべきであるし、そのための條件も整っているといえるのではなかろうか。

『史記』は古來名文の代表とされ、後世の散文にも巨大な影響を與えてきた。したがって、文學史において『史記』に言及する際、その文體にも十分な注意を拂うのは當然のことである。ただ、そうした文學史的視點を離れ、『史記』そのものの文學性に目を向けるなら、『史記』の文章の妙とは、多くの場合、物語的な內容を生き生きと表

現しているということなのであって、まず問題にすべきは、そこで語られている物語の方なのである。もちろん、『史記』の論贊も、古來名文とたたえられ、史書は採らぬのが建前の『文選』なども、論贊は例外的に收めている。とはいえ、論贊は、量的に見ても『史記』の一部でしかないし、内容から言っても、本文があってこその存在である。となれば、『史記』の文學性の研究は、やはり本文の、物語性の豊かな部分から始めるのが順序であろう。

『史記』のうちの物語的な部分には、晉文公重耳の物語が『左傳』『國語』を材料とし、蘇秦と張儀の話柄が今本『戰國策』とほぼ重なるように、司馬遷が基づいた史料をほぼ特定しうるものもあれば、項羽と劉邦のドラマにおける『楚漢春秋』との關係のように、なお今後の解明に待たれるもの、さらに司馬遷と同時代の人物の場合のように、司馬遷の段階ではまだ文獻化されていなかったとみられるものなど、語られた時代も史料の性格もさまざまなものが混在している。そこではまず、個々の物語についての研究が求められることはいうまでもない。それは、『史記』を司馬遷の「作品」としてではなく、司馬遷によって集められた物語の集成として見ることをひとまずは意味する。

とはいえ、個別の物語を問題にしているだけでは、『史記』を、中國古代の物語の資料としてとらえたことにしかならない。もちろん、『史記』にはそうした側面もあるのだが、『史記』を文學として讀むということは、最後には、『史記』の全體をひとつの文學的統一體としてとらえることをめざすものでなくてはならないし、そのような試みにわれわれを驅り立てるものが、『史記』にはあるように思われる。ただささにもふれたように、その際すぐに問題となるのは、『史記』のすべての部分が物語的性格をもつわけではないという、至極單純な事實である。われわれはこのことを、どのように考えるべきなのだろうか。

これまでの研究者が、この點を視野に入れなかったわけではない。田中謙二氏は、『史記』の記述に「物語體」と「記錄體」の二つのスタイルがあることを指摘し、後者においては、過去の史官の記錄である原史料を「ほとんどみずからの筆を加えずに轉寫」したとする。しかしその際、

司馬遷は「全く同一か或るいは同一方向をもつ事態や言動を反覆する」という方法によって、何かを描き出したという。たとえば、秦始皇本紀において、六國を滅ぼして天下を統一する過程においては、天象の異變・天災の發生・侵略戰爭の戰果・王侯貴族や重臣將軍の死亡記事の四種の記事が繰り返し記載されるとし、「そこには偉業の輝かしさなどみじんもなく、かえって暗黑時代の到來を、讀者にひしひしと感ぜしめずにはおかない」と述べている。そして、天下統一後の始皇帝については、巡狩の折に立てた六個の碑石の內容をひとつひとつ克明に轉寫することで、「獨裁皇帝の演ずる道化芝居は、いよいよ空虛さが強調される」というのである。[32]

『史記』は複雜な構成をもつ大部な書であり、それを文學として論ずる際、必ずしも隅々にまで目が配られているとはいえない。田中氏のこのような讀みは、一般にあまり顧みられない「記錄體」の部分にも文學性を認めようとする試みである。それは、武田泰淳が、表の中に「史記的世界の絕對持續」を讀みとろうとした姿勢にも通ずるものである。

田中氏の試みは確かに注目すべきものではあるが、司馬遷が反覆の手法によって史料を羅列することで、何かを描き出そうとしたとする見解には、直ちには同意しかねる。まず司馬遷がそのような意圖を持って史料操作を行ったかどうかがひとつの問題であるし、何といっても、「記錄體」の部分が、『史記』に文學性を求める場合、「讀者にとっては最もたいくつな部分」であることは、田中氏も認めざるを得ない事實である。

では、そのように物語的でない部分にも、文學としての內容を讀みとることができる場合があるのはなぜか。それは、たとえば秦始皇本紀の例で言えば、後半で示されるような、神仙に入れあげ不老長壽にあこがれる、弱く愚かな始皇帝、そして始皇帝の死後、趙高の思うままにあやつられ、帝國の滅亡を招いた二世——田中氏も指摘する通り、この部分については「記錄體」で書かれているわけではない——との對比においてそれらの史料を見ているからにほかならない。すなわち、成功と破滅の物語としての秦始皇

本紀という枠組みの中で「記錄體」の部分を解釋したときにはじめて、田中氏のような讀解が可能になるのである。このように言うと、田中氏の解釋は、自らが設定した枠組にテキストを當てはめただけの、何の根據もない恣意的なものと見られるかもしれないが、話はそう單純ではない。

始皇帝とその帝國の物語は、始皇帝本紀の中だけで閉じているわけではない。呂不韋列傳では、始皇帝の出生にまつわる祕話が語られる。呂不韋は、子楚（のちの莊襄王であり、始皇帝の父にあたる）が將來王位につくべき人物であるとみて、自分のお氣に入りの邯鄲の歌姫を、求められるままに差し出した。ところが實はこの女はすでに妊娠しており、その子が政、すなわちのちの始皇帝であるという。また、李斯列傳や蒙恬列傳は、始皇帝のもとで腕をふるった文官と武官の代表を扱ったものだが、そこでは、主役であるはずの李斯や蒙恬を押しのけるほどの存在感で、宦官趙高の專横が述べられている。いずれもいかにも物語的なスタイルであり、秦始皇本紀と合わせ見るとき、そこに一つの筋書きが浮かび上がる。――秦王政は、出生の祕密を抱えつつも、天下統一の偉業を成し遂げるが、彼の死後、一介の宦官である趙高によって、その帝國はもろくも破滅に追いやられる。――思うに、司馬遷の前にあった秦帝國の物語とはそのようなものだったのであり、始皇帝本紀においては、おそらくは天下統一の偉業の意義を傳えるために、ことさらにそうした物語的な史料を排除したと考えられる。私が田中氏の解釋に直ちに從えないのは、司馬遷の史料操作の意圖に對する氏の説明に贊成できないからである。

ただ、司馬遷の意圖を離れて、『史記』の全體をひとつの言語世界としてとらえたときには、始皇帝本紀の無味乾燥な記錄の羅列に不氣味さと空虚さとを讀みとるのも、またひとつの有效な讀みといえるのではないか。ただしそれは、司馬遷が意圖してそのような世界を創作したというよりは、『史記』の隨所に散在する始皇帝をめぐる物語を總合することによって、結果として浮かびあがってくるものであると考えるべきだろう。[33] ここでも、『史記』を司馬遷の「作品」とする視點は、愼重に遠ざけられねばならないのである。

『史記』には多くの物語が含まれているが、全體は物語として書かれたわけではなく、すべての部分が物語性をもつわけでもない。それは、いってみれば物語の星雲のようなものである。星雲は、ひとつのまとまった光の塊のように見えるが、實際には小さな星の集まりであって、すべての部分が輝いているわけではない。しかしそれぞれの星の光は互いに絡まり合い、全體としては、あたかもひとつの發光體であるかのように見えるのである。『史記』を文學としてとらえる際にも、『史記』のすべての卷の一字一句に至るまでを文學として讀もうとする必要はない。それは徒勞であるばかりか、恣意的なあるいは誤った讀みに至るおそれがある。われわれがなすべきは、『史記』に見られるひとつひとつの物語の性質を理解し、數多くの物語がどのように絡まり合っているかを考え、その絡まり合いにおいてどのようなことが表現されるかを見てゆくことである。そのようにして、古代中國のさまざまな物語の集成としての『史記』は、古代中國の物語世界の集大成としてとらえ直されることになるだろう。

ここまでわれわれは、司馬遷が『史記』の「作者」であるという視點をいったん拒否し、あくまで物語そのものに卽して讀む姿勢をとりつづけてきた。では、われわれはもはや司馬遷を顧慮する必要はないのだろうか。もちろんそんなことはない。『史記』は單なる寄せ集めではなく、全體の構成、とりわけ誰のために傳を立てるかという點には、司馬遷の意圖が強力に作用している。さらに、各卷につけられた論贊には、單なる歷史批評の域を超え、自らの言葉で各卷の物語に對する感慨を語った箇所が少なくない。伯夷列傳のように、傳記を記述することよりも、自らの運命論を述べることが先行したような卷さえある。

司馬遷は、ある時には物語の中の人物に對して深い同情を表明している。伯夷列傳では、伯夷・叔齊が武力革命に反對しつつ餓死した悲劇について、「仁を求めて仁を得たり、又何をか怨みん」「天道は親無し、常に善人に與す」といった先賢の言葉に疑問を呈し、ついには「所謂天道は是か非か」と叫びをあげるに至る。

しかし一方で、司馬遷は彼に前にある物語を受容せず、

それを分解しようと試みることもある。たとえば趙高は、始皇帝本紀や李斯列傳などでは、秦帝國の瓦解を引き起こす人物として、かなり重要な役割を果たしている。趙高が、秦に滅ぼされた趙の末裔であったことからすると、そこには趙高を主人公とした復讐譚の存在が想定できるのだが、[34]『史記』では彼のために傳が立てられていないために、物語としての首尾を失ってしまっている。逆に張良や蕭何の生涯にはこれといった物語的要素はなく、劉邦傳説の脇役でしかない存在なのだが、司馬遷は彼らのためにそれぞれ世家を書いている。そこには、これらの人物に關する公的な記録文書のほかに、劉邦の物語から切り取られたとおぼしき斷片的なエピソードが並べられているのである。[35]

彼はまた、物語の原型は保存した上で、それに對する批判を加えることもある。たとえば項羽本紀では、項羽の興起を述べながらも、「沐猴にして冠す」といわれた傲慢さや殘忍さを描くのだが、後には四面楚歌の狀況で虞美人と別れる悲劇が訪れ、その落差が讀者に感慨を與える。ところが司馬遷は、論贊の中では、はじめに項羽の速やかな興起をたたえ、「近古以來未だ嘗て有らざるなり」とまでいうのだが、彼の末路に對しては、「卒に其の國を亡い、身は東城に死すも、尚覺悟せずして自ら責過せず、[36]乃ち『天の我を亡ぼす、用兵の罪に非ざるなり』を引く、豈に謬らずや」と酷評しており、本文の筆致と全く反對になっている。

これまでの『史記』の讀者たちは、ある時は司馬遷と一緒になって、伯夷・叔齊のために涙を流し、またある時は司馬遷のことは忘れて、趙高の人品や項羽の戰術を論評してきたのだが、司馬遷が、彼の前にある物語に對して共鳴したり反發したりしながら、そのときどきで距離の取り方を變えているという點には、必ずしも注意してこなかったようだ。われわれはもはや、司馬遷を、『史記』の世界の造物主として見ることはできないが、さりとて、彼は單なる史科蒐集者では決してない。司馬遷がどのように彼の目の前の物語世界と向き合い、どのように『史記』の世界をつくりあげていったかということは、やはり『史記』の文學を研究する上での一大課題であり續けているのである。

四　「悲劇の星雲」と司馬遷の使命感

司馬遷が集めた大量の物語は、司馬遷というフィルターを通過することによってはじめて、『史記』の世界をかたちづくるものとなった。司馬遷は、自らの意圖に從って材料を選別し排列してゆくことで、ひとつのまとまった世界を築きあげる、有能な編集者であった。このような言い方ならば、說話を集めて自らの主張の助けとする諸子百家や、『左傳』『國語』のような歷史說話集、さらには『漢書』をはじめとする後世の史書の著者についても、同じようにあてはまるかもしれない。ただ『史記』における司馬遷の物語世界との交涉は、他の書に類を見ない複雜かつ密接なものである。

司馬遷は、物語を史料として丁重に扱い、切り取り貼り合わせる以上の改變はしない一方、論贊においては、理性的な判斷を越えて、自らの感情をしばしば表出している。それは、諸子の書物が、物語を自己の主張に服屬させ、もっぱら道具として用いるのと異なるし、他の史書が、物語の內容を、第三者的な地點から論評するのとも異なる。『史記』には、「編集者」という言葉から想像されるような、素材との安定した關係が缺けている。物語の星雲を前にした司馬遷が、驚き、戸惑い、憤り、悲しみ、人格のすべてをさらけ出してのたうち回っているさまが、そのまま映し出されているのである。

本稿では、『史記』の文學性の根源はその物語性にある、言い換えればその素材にあるという立場から、ここまでの考察を進めてきた。しかし、『史記』に司馬遷その人の人間性が映し出されているという點もまた、『史記』の文學性を構成するひとつの重要な側面であることは疑えない。どうやらわれわれも、司馬遷その人について考えなければならないところまできたようだ。幸い、司馬遷は、『史記』の最終卷である太史公自序において、自らが『史記』を書くに至るまでの道のりを、遠く司馬氏の先祖にまつわる傳說から說き起こしている。司馬遷は、單に物語を蒐集し編集しただけではなく、自らもまた物語を語っているのであり、そしてそれは、單なる編集後記にとどまらず、『史記』

の内容と複雑に絡み合っているのである。

太史公自序から司馬遷を考えるというのは、かつて武田泰淳が通ったのと同じ道のように見えるかもしれない。しかし、武田氏が、その歩みをここから始め、『史記』の内容の考察に向かったのに對し、われわれは、物語の星雲をくぐり抜け、武田氏とは逆向きにこの道を行くのである。同じ道であっても、通る向きが逆であれば、そこから見える風景は、當然違ったものになるはずだ。

『史記』の全體がそうであるように、太史公自序も、必ずしも全篇にわたって物語的な書き方がされているわけではない。しかしそのような中にも、司馬氏、とりわけ司馬談・司馬遷父子をめぐる濃密な物語がちりばめられている。

冒頭では、顓頊帝の時に天地を司ったという重黎にまでさかのぼり、司馬氏の輝かしい出自が語られる。この一節は、いま『國語』楚語下にみられるものとほぼ重なるが、太史公自序では、『國語』にない一句が書き加えられている。「司馬氏世々周史を典る。」この一句により、司馬氏が歴史を書くべき者であることが高らかに宣言されるのである。

この誇らしい宣言が、司馬遷自身のこととして再定義されるのが、これまでにもふれてきた司馬談臨終の場面である。談の遺命は、周室の太史であった司馬氏の傳統を繼げということ、孔子の『春秋』以來衰微している「天下の史文」を再興せよということの二點に要約できる。『春秋』を繼ぐということからも、司馬談に當世に對する批判的視點があったのは確かだが、それも、この時代の榮光を記錄せよという使命感あってのものである。「今漢興りて、海内一統す。明主賢君忠臣死義の士、余　太史たりて論載せず、天下の史文を廢するは、余　甚だ懼る、汝其れ念えや。」司馬談の使命感は、この最期の言葉に凝縮されているといえよう。息子も、「首を俯け涕を流して」、父の使命感と、それをなしとげられぬ無念とを、ふたつながら受け取ったのであった。

司馬遷はその後自らが太史令となり、太初暦の制定にかかわった際にも、孔子から五百年がたち、「能く明世を紹ぎ、易傳を正し、春秋を繼ぎ、詩書禮樂に本づくの際有ら

ん」と言った父の言葉を思い出し、父から承けた使命を自らのものとして再認識している。それにつづく壷遂との問答では、その使命を、司馬遷が自らの言葉で語っている。太史公自序の前半は、司馬遷が、父の遺命を通して、司馬氏の使命を内面化してゆく過程として讀み解くことができる。李陵の禍が、こうした使命感を暗轉させるのは、さらに數年後のことである。

漢朝の盛儀を記念し、『春秋』を繼ぐという使命感の產物として『史記』を見るなら、その編集の基準は、確かにわかりやすい。このような立場からすれば、張良や蕭何の功績を顯彰するのも、項羽が覇を唱えたいきさつと敗れ去った所以を評論するのも、伯夷・叔齊の高潔な人品を讃美するのも、みな太史公としてなすべき崇高な任務なのであり、それに對し、秦朝瓦解の原因をつくった趙高などは、全く取りあげる價値がないということになろう。

『史記』は五帝から同時代までの通史という體裁をとっているが、篇幅の大半を占めるのは、その後半、すなわち戰國から漢武帝にかけての時代である。それは、中國が分裂から統一へと向かう道のりである。『史記』が、漢武帝の時代の畫期的な意義を記念するために書かれたものであるなら、司馬遷は、彼が集めた史料を、分裂から統一へというシナリオに沿って組み立ててゆきさえすればよかったはずだ。

しかし、われわれが『史記』から受け取る印象というのは、こうしたシナリオとはかなり異なるものである。『史記』には、歷史の轉換點において、一種の犧牲者として滅びてゆく人物がしばしば現れる。最も典型的なのは、亡國の悲劇を背負った人物である。吳の滅亡を豫言しつつ自殺した伍子胥、楚が郢の都を追われるのをまのあたりにしつつ汨羅に沈んだ屈原、燕の滅亡の引き金を引く役回りを引き受けてしまった荆軻、始皇帝の死とともに轉落への道をたどった李斯、つかの間の覇王に終わった項羽、みなそうであり、これ以外にも枚擧にいとまがない。『史記』には、なぜかくも滅亡の悲劇が充ち滿ちているのだろうか。

『史記』に對して、本稿の前半で述べてきたようなさまざまな視點があり、それらが時に對立さえするのも、『史

記』という書物自身が内包するこのような矛盾によるのではなかろうか。『史記』を文學として讀む者は、まずそこに滿ちあふれる悲劇に目を奪われ、その暗い調子を、司馬遷自身が經驗した李陵の禍という悲劇と結びつけようとする。しかし、『史記』が司馬遷の創作でない以上、通常の文學作品を研究するようなやり方で兩者の結びつきを實證するのは困難である。『史記』と司馬遷をめぐる實證的研究は、むしろ、『史記』が、漢武帝の世を記念する書であるとする方向に傾く。ただ、それで問題が解決したわけでは決してない。なぜなら、そうした實證的研究は、太史公自序をはじめとするさまざまな言説——そこには純粋な記錄もあれば、司馬遷の思いが吐露された「任少卿に報ずる書」のようなものもある——を、『史記』と司馬遷についての事實を知るための史料として用いているに過ぎず、『史記』の悲劇性という問題については何も答えていない、というより、はじめから關心を示していないからだ。

しかし考えてみれば、『史記』が漢武帝の世を記念するものとして書かれたことと、その内容が悲劇に滿ちていることとは、そもそも矛盾することなのだろうか。戰國から大一統への道のりとは、さながらトーナメント戰のように、戰いの中からただ一人の勝利者が勝ち殘る過程であり、それは言い換えれば、ただ一人を除いて、すべての者が敗れゆく過程でもあったのだ。項羽などは、この過程を一身に背負った人物といえるだろう。楚の將軍の家に生まれ、楚王の子孫を擔ぎ出して戰い、最後には自ら西楚覇王を名乘った項羽が、一介の平民たる劉邦に敗れ去るというのは、戰國の世がもはや過去のものとなったということを端的に示している。項羽の傳説は、ただ項羽一人のみを傳えるものではない。それは、一人の英雄の悲劇に借りて、押しとどめることのできない歷史の奔流を描き出し、もはや歸ってはこない過去を哀惜するものなのである。

漢武帝に至る統一の過程、言い換えれば『史記』の世界において、敗れゆくのは、なにも武器を取って戰った者たちばかりではない。ただ一人の皇帝が君臨する專制統一帝國の理念にそぐわない考えや行動をする者は、すべてが敗者となるのである。そのことを指摘したものとして、バー

トン・ワトソン氏の以下の文章にまさるものを、私は知らない。

しかし自分の時代に對して抱いた司馬遷の幻滅の情は、特定の政策問題に對する不滿よりも、さらに深いものであった。彼は過去に異常なまでの愛情と共感をもっている歷史家であった。そして生涯の間に起った變化、彼がもっとも讃美した過去の理想の多くが死滅したことを、鋭敏に感じとった。自分の能力により立身でき、高い地位にのぼることができた周末漢初の日々に、彼は鄕愁を感じていた。荒っぽい直線的なやり方、君臣のあいだの忠誠心と友情、昔の政治顧問や理論家の遠慮ない率直さ、部下とともに困難を分かちあう優れた將軍たちの率先ぶり、それらを彼はたたえた。彼は英雄崇拜者であったから、過去の英雄を描くことに、その生涯の大部分を捧げた。それに反し自分の時代については、彼は、古代の自由、昔の個人的忠誠が、ますます發展する官僚機構と嚴密な法網とによって消え去っていくのをみた。[37]

ただ一つつけ加えるなら、ワトソン氏が司馬遷を主語として述べていることは、實はむしろ、彼の前にあった物語の傳承者たちについて、より強くいえることである。もちろん司馬遷も、そうした價値觀に強く共鳴している箇所が少なくない。ただ、物語世界の價値觀と司馬遷の價値觀との間には、埋めようのない大きな斷絶が一つあった。物語が、滅びゆく者を哀惜し鎭魂しようとするものであるのに對し、司馬遷は、古きよき價値を背負った人物が滅びゆくという物語世界の構圖を容認することができず、彼らをむしろそこから救い出し、永遠に顯彰しようとしているのだ。

そのことは、「太史公自序」とならんで、『史記』執筆の意圖をよく示す伯夷列傳においてもうかがえる。司馬遷は、伯夷・叔齊の事跡が經傳に見えぬことをいぶかしみ、その背後に名の傳わらぬ名士が無數にいることに思いをはせ、「巖穴の士、趣舍時有ること此のごとくなるも、類名堙滅して稱せられず、悲しきかな。閭巷の人、行いを砥き名を

立てんと欲する者は、青雲の士に附くに非ずんば、惡くんぞ能く後世に施さんや」と結ぶのである。

これまでわれわれは、『史記』を語るとき、司馬遷がどのような現實の中に生き、自らの、そして歴史上の現實をどうとらえていたかという點にばかり注意を拂ってきた。そこには、歴史家は現實を記錄し、文學者は現實を表現するという、無意識の前提があったのかも知れない。だが、司馬遷が、何よりもまず過去の傳承を大切にしたということを認めるなら、司馬遷にとって最大の問題は、むしろ彼自身の目的と、彼の目の前にあった傳承——とりわけ物語的傳承——との間の、深刻な矛盾のほうだったのではなかろうか。

太史公自序にいうところをすなおに受け取るなら、司馬遷は、統一帝國を完成の域に導いた武帝の榮光をたたえ、そこに至る歴史の道のりに位置づけるべき人物を記錄にとどめるために、『史記』の執筆を開始したはずだった。しかし、史料を集めれば集めるほど、そこに現れるのは、榮光の陰で滅びゆく者たちの墓碑銘ばかりだったのである。彼の前にあったのは、いくらかの無味乾燥な公式文書を除けば、過去を惜しみ、敗者を鎭魂する、おびただしい悲劇の巨大な星雲にほかならなかった。「悲劇の星雲」から「忠臣死義の士」を救い出すこと、これこそが、司馬遷が直面していた大きな課題だったのだ。

李陵の禍が司馬遷にもたらした影響についても、このような角度から見直される必要がある。彼はなぜ李陵を辯護したのだろうか。父の遺命を果たすべく、日々歴史上の「忠臣死義の士」を發掘している司馬遷にしてみれば、李陵のような人物は、まさに現代の「忠臣死義の士」なのであり、そのような人物が、匈奴に降伏したことによって「悲劇の星雲」に回收されようとしてゆくのを、默って見ていられなかったのではあるまいか。ところが、彼の行動は、「明主賢君」の意外な反應を引き起こし、宮刑という悲慘な結末を招き寄せた。ここにおいて彼は、自己の使命の犧牲となったのである。

李陵の禍以前には、司馬遷は、結局のところ、安全な高みに立って歴史を評論する傍觀者だった。今や彼は傍觀者

ではない。自らもまた古人と同様に歴史の渦中にいることを思い知らされたのである。ここで彼は、「發憤」の果てに著作に生涯を捧げた古人を列擧し、自らも彼らに連なっていることを表明する。

退きて深く惟いて曰く、夫れ詩書の隱約なる者は、其の志の思を遂げんと欲すればなり。昔西伯は羑里に拘われて周易を演じ、孔子は陳・蔡に戹せられて春秋を作り、屈原は放逐せられて離騷を著し、左丘は失明して厥れ國語有り、孫子は脚を臏せられて兵法を論じ、不韋は蜀に遷りて世に呂覽を傳え、韓非は秦に囚われて說難・孤憤あり。詩三百篇は、大抵賢聖發憤の爲し作る所なり。此れ人皆意に鬱結する所有りて、其の道を通ずるを得ざるなり、故に往事を述べ、來者を思う。

この一段はそっくり「任少卿に報ずる書」の引用であり、文體も整えられていて、前後の文とは明らかに違っている。ここでは、司馬遷の述べる歴史上の著述者が、『史記』を書く彼自身の姿と二重寫しになっている。父の遺命から始まった『史記』の執筆は、今や彼自身の生きる目的となったのである。

ここで、司馬遷が、物語に對する距離の取り方をそのときどきで變えていたことを想起しよう。佐藤武敏氏は、論贊における司馬遷の態度が一様でないことに注目し、そこから、執筆の時期が李陵の禍の前か後かを判斷しようとする。すなわち、李陵の禍以前においては、挫折した人間の短所・缺點を指摘し、きびしく突きはなす書き方をしているのに對し、李陵の禍以後は、不遇な人物に對して悲しみや同情の目をもって見つめているという。[38] このような基準で執筆時期を決定できるかどうかについては、嚴密な意味での論證は難しく、佐藤氏も認めるように、試論としての意味合いが強い。とはいえ、司馬遷の、物語――とりわけ悲劇――に對する態度に、距離を置いたものと同情的なものとがあることは事實である。そして、太史公自序においては、歴史を第三者の高みにおいて裁斷する姿勢から、歴史とひと連なりである自己を意識しつつ書く姿勢への變化

を讀みとることができるのである。太史公自序のこの箇所は、司馬遷が、李陵の禍をきっかけに、自らを物語世界とひと連なりのものとして組み入れたことの表明として讀み解くことができるだろう。

もちろん、彼は、自らを、そしてその『史記』を、「悲劇の星雲」に埋没させるようなことはしない。太史公自序は、このあと、百三十卷のひとつひとつについて、その撰述の意圖を述べてゆく。そこにみられるように、『史記』においては、顯彰する價値があると司馬遷によって認定された人物をめぐって史料が集められてゆき、それ以前にあった物語は、必要に應じ切り取られ、貼り合わされる。そのような作業の末に、百三十卷からなる『史記』の全體が、漢武帝に至る道のりを語るというひとつの意志のもとに構築されたのである。

太史公自序のいよいよ大詰め、太史公自序そのものの撰述意圖を述べたところでは、改めて、漢が五帝・三代を繼ぐ輝かしい王朝であること、司馬氏がそれを記錄する榮譽を擔うことを語り、十二本紀・十表・八書・三十世家・七十列傳の趣旨を說き、「之を名山に藏し、副は京師に在り、後世の聖人君子を俟つ」と結ばれる。伯夷列傳の「惡くんぞ能く後世に施さんや」に對する回答が、ここにある。

しかし一方で、司馬遷は、自らの意圖に沿って物語を書き改めるようなことはしなかった。だから、百三十卷の大伽藍のそこかしこに、「悲劇の星雲」がしっぽをのぞかせている。司馬遷は、趙高に列傳の主人公の地位を與えなかったが、趙高の物語を抹殺することはしなかったし、項羽をどのように論評しようとも、項羽から悲劇のヒーローとしての色彩をぬぐい去ることもしなかった。彼の意志はどうあれ、結果として、司馬遷は、上古の悲劇的世界の埋葬人をつとめることになった。そればかりか、最後には、彼自身が、自らの使命感に殉ずる形で、悲劇の主人公になってしまったのである。

だから、後世にあっては、司馬遷と『史記』をも「悲劇の星雲」の中に取り込んで解釋することが珍しくない。太史公自序集解に引く衞宏『漢書舊儀注』では、「司馬遷景帝本紀を作るに、其の短及び武帝の過ちを極言し、武帝

怒りて之を削去す。後に李陵を擧ぐるに坐し、陵　匈奴に降る。故に遷を蠶室に下す。怨言有り、獄に下りて死す」とまでいっている。ここでは、司馬遷の批判に武帝が怒り、逆に司馬遷は李陵の禍に際し武帝に怨みをもつという、怨恨の連鎖の中で『史記』がとらえられている。班固が『漢書』司馬遷傳を書くにあたって、太史公自序のほかに、宮刑に處せられた後の心情を吐露した「任少卿に報ずる書」を主な材料として用いたのも、當時すでにこのような理解があったから[39]とも考えられるし、また、司馬遷の傳記がそのような形で書かれたことが、『史記』を怨恨の書とする見方をいっそう補強したことも考えられよう。

衞宏の所說が史實に合わないことを指摘[40]するのはたやすいし、このような理解は、おそらく、司馬遷の本意でもなかろう。それでもこのような說が出てくるのは、司馬遷が、物語を第三者の立場から切り貼りするばかりではなく、その世界の中に深く立ち入っており、さらに自らも物語世界に連なるような經驗を餘儀なくされたからなのではなかろうか。

『史記』における司馬遷は、單なる史料蒐集者ではなく、編集者というのでもない。彼と『史記』との關係は、通常の文學作品における作者と作品の關係以上に密接である。この點こそ、『史記』が、文學性において他の史書の追隨を決して許さない所以なのである。嚴密な實證的研究とはいえない武田泰淳の論著が、あれほどまでに影響力を持ったのも、『史記』と司馬遷とのこうした密接不可分な關係に立脚し、その立場を貫徹して、『史記』の全體像を描ききったという面をもっていたからにほかならない。

ただし、武田氏は、「作者」司馬遷が、あたかも小說作品のように、自らの發憤から出發して『史記』の世界を構築したかのように理解したのだが、司馬遷と『史記』の世界との關係は、そのような一方向からの理解に收まるものではない。司馬遷は、目の前の巨大な「悲劇の星雲」と格鬪し、自らの執筆理念に照らして、それぞれの物語を加工したり論評したりした。それは形の上では成功したから、司馬遷は物語を制壓したということもできよう。ただ、司馬遷は、物語自體を抹殺したり、根本的に書き改めたりし

たわけでは決してない。さらに、執筆の過程で、司馬遷自身も悲劇的な經驗をし、「悲劇の星雲」に連なる自分自身を意識するようになり、おそらくそれによって、物語に對する態度も變わった。あげくには、司馬遷自身までもが「悲劇の星雲」中の人物であるかのように受け取られてゆくのである。『史記』の文學性のユニークさは、司馬遷の前にあった傳承の厚い蓄積と、司馬遷自身との、どちらが勝者ともつかぬ、否、現在進行形のままで讀者の前に投げ出された、終わりなき戰いにあるといえるのではなかろうか。

本稿は、『史記』はどのように讀まれてきたかという問いから出發して、『史記』を文學としてどのように見るかというところまで驅け抜けた。その間に位置すべき、『史記』の具體的細部についての考察を缺いている。こうした文章は、本來、『史記』の個別の問題に對する長年の研究の後に書かれるのがふさわしいのだろう。ただ、『史記』という巨大な對象に立ち向かうためには、大雜把であれ全體の見取り圖を手にしておかなければ、自らの立場を見失うおそれがある。そして、はじめにふれたように、史學の立場から『史記』を見直す試みが次々になされている中、それらをふまえた上で、文學研究の側からも發信がされるべき時期なのではなかろうか。『史記』の專家でもない私が、このあまりにも未熟な考察を、あえて世に問う所以である。

註

① これまでの『史記』研究を概觀するものとして、國内では池田四郎次郎著、池田英雄校訂・增補『史記研究書目解題』（明德出版社、一九七八）をはじめとする書目があったが、中國においては、最近『史記研究集成』全一四卷（二〇〇五年、華文出版社）が出版された。その第九卷『史記文學研究』（可永雪著）では、『史記』の文學的側面の主要な研究成果が主題別に紹介されている。第一三卷は、『史記研究史及史記研究家』（張新科、兪樟華等著）として過去の研究の總括にあてられ、日本における研究においても、同卷中編第二章に、藤田勝久氏による「日本對『史記』的傳承與研究」（孫文閣譯）が收められている。また第一四卷は『史記論著提要與論文索引』である。

② 『漢文學史綱要』第十篇「司馬相如與司馬遷」に、「恨爲弄臣、寄心楮墨、感身世之戮辱、傳畸人于千秋、雖背春秋之義、固不失爲史家之絕唱、無韻之離騷矣。」

③ 初版は一九四三年、日本評論社。以後多くの版を重ねているが、戰後に出版された菁柿堂版（一九四八）は、書名を『史記の世界』と改めたほか、內容の一部が改變されている。詳細は「武田泰淳全集」（筑摩書房、一九七一―七三）第一一卷の古林尙氏の解題を參照。なお、戰後發行された版は、筑摩書房の全集を除き、菁柿堂版を底本とする。

④ 『司馬遷』一四頁。以下この書の引用は初版本による。

⑤ 同書、自序、三頁。

⑥ 同書、二一―二二頁。

⑦ 同書、三八頁。

⑧ 同書、四〇頁。

⑨ 同書、四一頁。

⑩ 「はげしい戰地生活を送るうち、長い年月生きのびた古典の強さが、しみじみと身にしみて來て、漢代歷史の世界が、現代のことのやうに感じられた。」（同書、自序、二頁）「しかし書くそばから考へが變り、三年間、自分の位置を定めることが、出來なかつた。……あの日以來、心がカラッとして、少し書けさうになつた。」（同前、三頁）「あの日」とは昭和十六年十二月八日、太平洋戰爭開戰の日をさす。なお引用中の最後の一文は、戰後の版では削除されている。

⑪ 同書第二篇Ⅲ「『表』について」、一三六―一四六頁。

⑫ この時期には『史記』の邦譯が相次いで出されたが、そのうち文學研究者を中心としてなされたものには、野口定男・近藤光男・賴惟勤・吉田光邦『史記』（平凡社「中國古典文學全集」四・五、一九五八―五九）、田中謙二・一海知義『史記』（朝日新聞社「中國古典選」、三册、一九五八―六四、新訂版一九六六―六七。ただし、初版が訓讀によるのに對し、新訂版は現代語による解釋と鑑賞を附しており、事實上の新譯である）、小川環樹・今鷹眞・福島吉彥『史記列傳』（筑摩書房「世界古典文學全集」二〇、一九六九）などがある。ちなみに同時期に史學者によってなされた『史記』の翻譯としては、小竹文夫・小竹武夫『現代語譯史記』（弘文堂、八册、一九五六―五七）、貝塚茂樹・川勝義雄『司馬遷』（列傳部分の邦譯。中央公論社「世界の名著」一一、一九六八）が擧げられる。

⑬ 李長之『司馬遷之人格與風格』、開明書店、一九四八。Burton Watson, *SSU-MA CH'IEN: Grand Historian of China*, Columbia University Press, 1958.

⑭ 太史公自序。なお、宮崎市定氏は、この二句について、「厥れ六經・異傳を協せ、百家・雜語を整齊す」と讀む說を立てている。「身振りと文學」（後出）參照。

⑮ 『漢書』六二司馬遷傳贊。

⑯ 太史公自序に、「遷爲太史令、紬史記・石室金匱之書」。

⑰ 初出は『中國文學報』第一三冊、一九六〇。『史記』（前掲）「春秋戰國篇」（一九六三）にも收める。

⑱ 『司馬遷』第二篇Ⅴ「結語」、二一九頁。これも戰後の版で削除された箇所である。

⑲ 初出は『中國文學報』第二〇冊、一九六五。

⑳ 初出は『東洋史研究』第三五卷第四號、一九七七。

㉑ 藤田勝久『史記戰國史料の研究』（東京大學出版會、一九九七）は、その代表的な成果といえよう。

㉒ 平勢隆郎編著『新編史記東周年表――中國古代紀年の研究序章――』、東京大學東洋文化研究所報告、一九九五。

㉓ 平勢『「史記」二二〇〇年の虚實――年代矛盾の謎と隱された正統觀』（講談社、二〇〇〇）六三―七四頁にかけて、項羽や呂后に本紀が立てられていることの意義と關連づけて述べられている。

㉔ 『漢書』五四李陵傳に、「初め、上　貳師（李廣利）を遣わし大軍もて出だすに、財かに陵をして助兵たらしむるのみなるに、陵と單于と相値うに及び、而るに貳師　功少なし。上以えらく、遷は誣罔し、貳師を沮まんと欲し、陵の爲に游說すと。遷を腐刑に下す」、『漢書』六二司馬遷傳に引く「任少卿に報ずる書」にも、「明主深く曉らず、以爲らく、僕は貳師を沮みて、李陵の爲に游說すと。遂に理に下す。拳拳の忠も、終に自ら列ぶる能わず、因りて上を誣うると爲し、卒に吏の議に從う」。漢代において「誣罔」が重罪であったこと、そしてその背後に當時の裁判における供述第一主義があったことについては、冨谷至『ゴビに生きた男たち――李陵と蘇武――』（白帝社、一九九四）一三一―一三四頁及び二一六―二二一頁に詳しい。

㉕ 「任少卿に報ずる書」に、「遂に理に下す」「卒に吏の議に從う」。伊藤德男『「史記」と司馬遷』（山川出版社、一九九六）二三三―二三四頁に、當時の他の例をも擧げて論じている。

㉖ 『漢書』司馬遷傳に、「遷既に刑せらるるの後、中書令と爲り、尊寵せられて職に任ず」。伊藤、前掲書二三七頁以下では、特にこの點を重視する。

㉗ 李長之、前掲書第六章「司馬遷之體驗與創作（下）――史記各篇著作先後之可能的推測」（一五一―一〇六頁）。

㉘ 佐藤武敏『司馬遷の研究』（汲古書院、一九九七）第七章「『史記』の編纂過程」、二八八―二九一頁。

㉙ 「太史公自序」によれば、『史記』の述作は司馬談の遺命によるものであるが、いくつかの篇は、司馬談によってすでに書かれていた可能性がある。この點の具體的な考證は、D・ボッデ、李長之、顧頡剛ら多くの研究者によってなされており、佐藤氏も、前掲書第二章三「司馬談作史考」（七〇―九六頁）において自說を述べている。氏はさらに、司馬遷の執筆と見られる篇についても、內容上父の遺命と密接な關連を持つ卷は、李陵の禍以前の執筆である可能性が高いとし

ている（同書第七章、二九六―三〇〇頁）。

㉚「太史公自序」に「凡そ百三十篇、五十二萬六千五百字、太史公の書と爲す。序略は以て遺を拾い藝を補い、一家の言を成し、厥れ六經の異傳を協せ、百家の雜語を整齊す。」「報任少卿書」にも、「凡そ百三十篇、亦た以て天人の際を究め、古今の變を通じ、一家の言を成さんと欲す。」

㉛ Henri Maspero, "Le Roman de Sou Ts'in," *Études Asiatiques: publiées à l'occasion du vingt-cinquième anniversaire de l'École Française d'Extrême-Orient, t. 2* (publications de l'École Française d'Extrême-Orient 20), 1925, pp. 127-141.

㉜『史記』（朝日新聞社「中國古典選」）初版「漢武篇」（一九六四）、「解說――『史記』の成立過程とその敍述形式について――」第五節、二八一―二八五頁。なお、この「解說」は、新訂版では、副題を取り去って、「春秋戰國篇」の卷頭に移され、字句にも若干の修改がある（該當箇所は一九―二二頁）。

同樣の趣旨は、これに先立つ「『史記』における表現の反覆」（初出は「東方學報」（京都）二七、一九五七）においても、樊酈滕灌列傳を例に論じられている。「本來史官である司馬遷は、かれら武人の傳記を書くにあたって、宮廷に保存されていた軍功簿に直接資料を求めたのである。……だが、ふしぎなことに、かような敍述形式で提供されると、かれらの戰功の事項がいかに多くても、たとえば透明紙に印刷された同じ文字を幾枚重ねてもやはり一字であるように、たちまち單純化されて、代りにそのインクの色はいや增すように、單一化されたものがわれわれの腦裡に強烈に燒きつけられる。……要するにこれらの武人は、韓信や彭越、或は黥布のような強烈な自我を具有せぬ、ただ本能的に忠勤を勵むだけの、スケールの小さな〈獵犬的人間〉に過ぎないことを感ずるのである。」（引用は『ことばと文學』（汲古書院、一九九三）三七―三八頁による）

㉝ 同樣のことを樊酈滕灌列傳についていえば、これらの人物はもともと彼ら自身の獨立した物語をもたず、劉邦傳說の脇役でしかなかったために、その傳記は無味乾燥な公式記錄の羅列でほとんどが占められることになり、それによって、彼らの存在の輕さがより明白に浮かび上がるということになろう。

㉞ 趙高の生い立ちは、蒙恬列傳に簡單にふれられている。「趙高なる者は、諸趙の疏遠の屬なり。趙高の昆弟數人、皆生まれながらに宮に隱せられ、その母は刑僇せらる。世世卑賤なり。」「生隱宮」は、集解に引く徐廣に「宦者と爲る」という。趙が秦に滅ぼされた際、趙の血筋を殘さないように、生まれてまもなく宮刑に處せられたものと考えられる。なお、秦帝國の物語と趙高の關係については、宮崎市定「史記李斯列傳を讀む」に秀逸な分析がある。

㉟ たとえば留侯世家には、晩年の劉邦が太子を代えようとして、四皓の説得によりあきらめたことを載せるが、これなどは明らかにもと劉邦傳説の一插話だったのであり、張良が四皓の招請に盡力したために、その傳記に收められたものと考えられる。逆に張良が鴻門の會に參加した折のことは、留侯世家では「語は項羽の事の中に在り」として、一切省略されてしまっている。

㊱ 原文「尙不覺悟而不自責過矣」。『漢書』三一陳勝項籍傳贊は「過矣」を「過失」に作るが、『史記會注考證』に「而不自責過矣の六字は連なりて一句に作る。過も亦た責なり、過誤の過に非ず」というのに從った。

㊲ バートン・ワトソン著、今鷹眞譯、『司馬遷』（筑摩書房、一九六五）五五―五六頁。原文は注⑬前掲書、三五頁。

㊳ 佐藤、前掲書、三六三頁。

㊴ 衞宏は、『後漢書』儒林傳下に、光武帝の時に杜林から古文尙書の學を受けたこと、議郎の位についたことなどを載せるから、明帝・章帝期に活躍した班固よりやや年長であったと思われる。

㊵ 景帝本紀は、事柄のみを記す大事記の體裁で書かれており、皇帝批判に結びつくような記述は見あたらない。司馬遷が李陵を推擧したというのは、李陵が匈奴に降った際に辯護したという『漢書』司馬遷傳の記述と異なるし、司馬遷が獄死したというのも『漢書』には見えない。

なお『漢書』司馬遷傳によれば、『史記』は一三〇卷のうち一〇篇が、目錄のみで本文が缺けていたとされ、張晏の注によれば、景帝本紀もそれに含まれる。『史記』太史公自序索隱はこれを引いた上で、「景紀は班書を取りて之を補う」という。たしかに今本景帝本紀は、他の本紀と比べて簡略なものではあるが、『漢書』景帝本紀にない記述をも含むから、通說は索隱の說には否定的であり、『史記』景帝本紀は司馬遷の原本であると考えられている。

［附記］ 本稿の構想を初めて公にしたのは、中國文學會第一八回例會（二〇〇三年六月、京大會館）において、「『史記』と漢代のものがたり」と題して講述した際にさかのぼる。ついで翌二〇〇四年八月、南京大學の主催で開かれた中國古代文學文獻學國際學術研討會に參加するに際して、《文學史家如何讀〈史記〉？》と改題して發表した。本稿は、南京での發表原稿をふまえ、さらに大幅に加筆修正を施して成ったものである。その間、中國文學會において今鷹眞教授の御示教を受けたのをはじめ、多くの方々から勵ましをいただいた。それらなしには、遲々として進まぬ執筆を續けることは困難であったろう。この場を借りて感謝申し上げる。